
硝子の薔薇～出逢い～

クロネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

硝子の薔薇～出逢い～

【Zコード】

Z3451M

【作者名】

クロネコ

【あらすじ】

記憶を失くした少女は、目が覚めると 突然死刑を宣告されてしまった。

そんな彼女を救つたのは、死刑宣告を下した國王陛下の奥方の王妃様。

これは、これから書こうと考えている物語の序章です。

「ねえ あなた？」

わたくしの侍女にならない？」

突然 そう言われた時、わたしは意味がわからなかつた。

だつて 貴女のお部屋に呼ばれる前 わたしは、死刑宣告を受け
ていたのだから。

「何をおっしゃられてこられるのです？」

この娘は、どのような経緯で王宮に連れてこられたのか 貴女様
も、「存知でしょ？」

顔色のえたのは、おそらくこの美しい女性付きの侍女達だと想つ。

みんな とっても綺麗な羽織物を身に纏つて いるから……。

だけど 自分は、どうしてこの部屋に招かれたのかもわからずこい
る。

目の前で微笑を浮かべている艶のあるウェーブの掛かった黒髪のこの女性は、何者なのだろうか？

「あら、シャーリー？」

わたくしだって わかつてこらつもつよ？」

「でしたら……」

「だからこそ 彼女をわたくしの侍女にしたいのよ。

そうでもしなければ いの子は、処刑されてしまつのでしょうか？」

いくら 神官の申し出でも 決め付けるのは、よくないのよ」

勇気を振り絞つて進言したシャーリーをこまかくと同情しちゃう。

綺麗な腰の辺りで一本に纏められているアッシュ・ショウブロンドの髪が、緩やかに垂れ下がっている。

「ですが 陛下は、国の為を思い その話し入れを受け入れるこ

とにならつたのですよ？

この娘を処刑するより命じたのも 国を危険に晒さない為なのです
から

今度は、多分 一番上級な侍女が真剣な顔になつた。

白髪のかブラチナブロンドのかわからぬ前髪から見える赤み
の掛かつた瞳の色は、何だか怖い。

「あら わたくしは、陛下の思いを無碍にするつもりもないのよ？」

陛下は、とてもお優しい方だわ？

年端もいかない少女が、無残にも処刑されるのを見ていられないか
ら わたくしにこの子の処刑が決定されたことをお話になつて下
さつたのよ。

わたくしが、どんな事をしても この子を救うと信じてッ！」

力説なさつている彼女に わたしは、目を瞬ぐだけ。

だって その会話の内容そのものが、理解できていないのだから。

けれど 考え込んでいると いつの間にか、彼女の顔がすぐ近くに迫っていた。

思わず悲鳴を上げそうになつたけれど 何とか踏み止まつたことを、後ろで息をついている方々に褒めてもらいたい。

「それで セツキのお話に戻るけれど……あなた、わたくしの侍女にならない?」

話が戻つてきただことで わたしは、固まるしかない。

だって この場で 絶対に発言する「こと」自体、許されているとは思えないのだから。

先ほど この方と会話していた侍女らしき人達が、すつゝ怖い目で睨んできているし……。

だけど 一番年配の女性が、息をつく姿が見えた。

「お 答 え な セ い

唇だけが、そう動く。

少女は、震えていることを隠すよつて 背筋を伸ばした。

「無理です」

初めて発した声に 誰もが息を呑んだのは、氣のせいだらうか？

田の前にいる女性も、驚いたように 田をパチクリさせてくる。

だが その顔は、満面の笑みに変わった。

「貴女の声…………まるで天使のよつて美しいわ？！」

なぜ そんなに綺麗な声を持つているといつて 黙つたままだ
つたのかしら？

まるで子供のよつて田を輝かせている女性に 少女は、戸惑いを隠
せない。

「あなたの声 亡くなられたお母様の歌声に似ているわ？」

それに 瞳の色は、片方だけだけど お兄様にソックリだわ？

ルチア…………貴女も、そう思わない？」

そう話しかけられたのは、先ほどの年長者の侍女。

「ええ ですから、少々驚きました」

素氣なく答える彼女に 女性は、苦笑氣味。

「あら ルチアは、怒つているのではなかつたの？」

「ずつとい、仮面なんですもの」

「生まれてからこの顔です」

ルチアさんは、やつて終えると また わたしに視線を向けた。

「あなたは、王妃ミリアム様にお仕えする覚悟はありますか？」

突然の質問に わたしは、”え？”と、思わず声を上げてしまひ。

「……おひれる ミコアム様は、お世辞にも 普通の王妃ではあります
りません」

わたしは、目の前にいる女性を思わず凝視してしまった。

まさか この方が、この国の王妃様などと 思いもしなかつた
のだから。

「……自分の興味にそそられる事がありましたら 自ら足を運び、
吟味するのです。

数日前にも 下町の住人達の中で流行っているといつお菓子が食べ
たくて お一人で城を抜け出すという醉狂を見せ付けてくださいま
した。

結局は、薬剤を仕入れに来ていた殿下の目に留まり 城へ連行され
ましたが…… 「ルチア 印象が悪くなるわ?」

「普通の王妃様は、死刑宣告を受けたばかりの娘を……自分の部屋に
無理やり引き込んで 侍女にならないか誘いません。

宰相閣下や他の皆様方が、度肝を抜かされて口を開かれていた様子
に お気づきでしたか?

ただ侯爵様は、何か含み笑いをしておられましたけど。

陛下も何も見なかつたフリをなさつて お部屋に籠られております
し」

口を挟んできた王妃様に対して ルチアさんは、厳しい。

けれど このまま話が進んでしまつていいのだろうか?

わたしは、意を決したように “あの”と、声を発した。

その声に 部屋にいた皆の視線が、一気に集中する。

何だか すっぽり居心地が悪い。

「どうして わたしをそんな風に侍女になさいたいのですか?

わたしは、先ほど 確かに陛下から死刑宣告を下されました。

全くの身に覚えの無いことですぐ 確かに自分でも怪しいと自覚があります。

周りの方々のお話によれば わたしは、突然どこからともなく現れ

数日もの間、意識がなかつたのですよね?

そして 意識を失つ前に 不可思議な言葉を発して いたと窺いま

した。

田を覚まさない間には、お医者様に診察していただき 胸の部分におかしな癌がある」とも聞いております。

こんなにも怪しき癌が揃つてゐるといつて、なぜ、侍女にとまつしゃりれるのですか?」「

「フフフ……話に聞いたけど、とても美しい薔薇を象つた癌らしきわね?」

その言葉に、わたしは、思わず服の上から胸の心臓部を手で押さえゐる。

「あなたは、謙遜しているわ?」

ルチアも言つていたでしょう?

わたくしは、普通の王妃と違つてゐる。

それに、陛下は、確かにあなたにとても残酷な言葉を下した。

けれど、そのお心の奥では、あなたを救いたいと考えられていたのよ?」

だから、わたくしにあなたの話をしたの。

「H宮内あなたを救えるのは、おやじく わたくしじだけだから」

自信満々な微笑を浮かべている王妃様に わたしは、理由はわからなけれど 頬に暖かい何かが伝つていてことに気が付いた。

他の誰々とも、その様子に気が付いて 顔を見合わせてしまつている。

「申し訳ございません。

無様な姿を晒して…… 「そんな事ないわ？」

懸命に目を擦りつとしていくと 身体を柔らかく暖かな何かに包み込まれた。

少し思考が停止して やつと 自分が、王妃様に抱きしめられて いる事に気が付く。

「本当は、あなたが一番不安なんですもの。

目を覚ましたら 自分が、誰のかもわからず 怖い方々に囲まれて 突然、口々に怪しいと言われ続けたのよね？

何者かと問いただされて 一番…… あなたが、それを知りたい

はや

顔を上げると　王妃様の綺麗な緑色の瞳と田が合つ。

「その涙は、あなたの心の訴えなのよ。

わたくしの貧相な胸で悪いけれど　思い切り泣きなさい？」

その言葉を聞いて　わたくしは、心の奥から何かがが込み上げてくるのを感じて　声に出して泣き出しました。

王妃様は、その間　ずっと、自分を優しく抱きしめてくれていたらしく。

～～～

「申し訳ござつませんでした」

わたしは、ガラガラになつてしまつた声で水を差し出してくれた王妃様やルチアさんにシャーリーさん達侍女の方々に頭を下げた。

その様子に　みんな、顔を見合わせてしまつてこらしー。

「フフフ……思い切り泣いて 少しは、落ち着いたんじゃなくて？
泣くって事は、心の奥に詰め込んでいた想いという箱を開け放つといつことですもの」

王妃様は、ニッコリと微笑んで わたしがしがみついて、グシャグシャになってしまったドレスを伸ばしている。

「申し訳ございません。

思い切り抱きついてしまって……何だか、王妃様に抱きしめていただいていたら 懐かしいような気がして」

わたしの眩きに 王妃様は、嬉しそうに微笑んだ。

「あらッ！

だったら 何度でも抱きしめてあげるわ？

それに 先ほどの侍女にならないかといつ申し出なのだけど

その言葉に わたしは、ハッとしたよつて 背筋を伸ばす。

「あなたが、記憶を取り戻すまで　わたくしの侍女にならない？」

身分については、心配要らないわ？」

実家のお父様に　あなたを養女にしたいと数日前に招く前に鳩を飛ばしたの。

それで　既にその準備が進められているのよ？」

どうやら　自分の意思を聞かれる以前に　最初から、侍女になるしかなかつたらしい。

侍女の皆様方は、その話が初耳だつたらしく　拳動不審になつてしまつてゐる。

どう答えたらい良いのかわからず　王妃様の背後に立つてゐるルチアさんに視線を向けると　頷かれてしまつた。

これは、一体どういう意味なのだろうか？

訳がわからず、頭を抱えていると　再び、王妃様の顔が目の前に……。

多分…………答えは、一つしかない。

「王妃様…………出来る限りの時を、貴女様にお仕えすることを誓います」

わたしは、膝を折つて 頭を下げた。

その言葉に満足して下せつたのか ミコアム様は、”赦すわ”と、
高らかに答える。

「ううう…………わたしは、王妃ミリアム様付きの侍女となつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3451m/>

硝子の薔薇～出逢い～

2010年10月9日02時20分発行